

## 横山大観と信州角間芸術村

——大観別荘建築に夢をかけた人達——

### 一 はじめに

日本画の大家、横山大観（明治元年—昭和三十三年）の大画室「嶽心荘」が、山ノ内町角間温泉にあったことは、あまり知られていない。

一昨年の本学『紀要』（第二十一号、一九九八年）に、筆者が「画家寺崎廣業と信州—信州風景を題材に制作」を書いた。この中で、「廣業死後も門下生は、しばしば山ノ内町を訪れ、この地に果亭文庫の存在を知り、志賀高原の風景美と果亭の名を全国に広めた。その後、近くの角間温泉に横山大観の別荘を建てることになったのも、院展の同人であった廣業の別荘が、上林にあったことを忘れてはならない。」

と、このように紹介した。

また、すでに「北信ローカル新聞」（平成十一年元旦号）に、「横山大観と嶽心荘」と題して、この一部を発表していることを記しておきたい。なお、大観の大画室建築は昭和四年である。当時を知る人も少なくなり、この機会に調査記録をした。

さらに、横山大観が角間温泉に招かれて、院展の仲間と大挙して来角したことを紹介した記事がある。「信濃毎日新聞」（昭和六十年

山本 秀 磨

十一月十日）の「美・私の一点」欄に「東洋画の精神を近代化」と題して、「嶽心荘」前での記念写真とともに掲載されているものだ。

### 二 「信濃毎日新聞」による紹介記事

明治三十年代の日本画壇は、岡倉天心の指導のもとに日本画の革新運動が進められていた。その舞台となった初期日本美術院の〆四天王〆は、大観をはじめ下村観山、菱田春草（飯田出身）、西郷孤月（松本出身）だった。彼らの友情は、貧困にもめげず苦しい制作を共にしただけに、特に厚かった。日本美術の過去の模倣ではなくて、伝統のうえに新しい感覚で写実を加えた近代日本画の創造に立ち向かった。

大観は、天狗党で水戸藩に争いが残っている頃、一八六八年（明治元）水戸の自宅裏に難を避けた竹林の中で生まれた。長じて母方の横山家を継いで秀磨と改めた。東京英語学校に学び、明治二十二年東京美術学校開校とともに入学した。卒業後、同校助教教授になったが天心、春草らと共に辞職して日本美術院の創立に参加したのである。

写真（『山本四代画集』から）は、昭和四年に下高井郡山ノ内町

角間温泉の有志が郷土文化発展のため、大観（写真左から二人目、右端は地元の画家山本蕙田）らを招いた時のものである。乗馬ズボン姿の大倉喜七郎（旧大倉財閥、東京・大倉集古館の生みの親喜八郎の子で大観の後援者）は翌五年「日本美術展覧会」をイタリアで開いた。俗に「ローマ展」とよばれるこの展覧会は、大観が実質的に人選と運用に当たった。帝展派の川合玉堂と京都派の竹内栖鳳の協力を得て大観の「夜桜」、栖鳳の「蹴合」、前田青邨の「洞窟の頼朝」など百七十数点の作品を集めた。日本から大工を連れて行って、床の間を作り、日本画を初めて体系的にヨーロッパに紹介したのである。四週間で十七万人が入ったという。水墨画、濃彩画にも数多くの問題作を残し、東洋画の精神を近代化した大観は、十二年に最初の文化勲章受章者となった。二十五年、老齢を理由に芸術院会員を辞し、三十三年に九十歳で没した。

### 三 「信毎」記事が縁で大観記念館と交流

「信毎」の記事の最後に（一）と記してある。これは当時文化庁で美術関係の記事を担当されていた伊藤正大氏である。発表後、数日してから、信毎より電話があり、「東京上野にある大観記念館より、新聞に掲載されていた、写真の希望があり、送っていただきたい」との連絡を受ける。掲載された写真のことも、信州「嶽心荘」のことも知らなかったとのことであった。

拙著『山本四代画集』（昭和四十八年）に、内田恒雄山ノ内町教

育委員長が「山本蕙田横山大観を招く」の項で、写真も経緯も出ているので、この画集を送ることにした。これに対する礼状に、その前後のことが書かれているので記しておく。

「山本秀磨 殿

（財）横山大観記念館

印

常务理事 横山 隆 印

お健やかに初春をお迎えのことと存じます。さて、このたびはからず山本先生の画集をご恵贈いただき厚く御礼申し上げます。弊館の貴重な資料として永く保存活用し、ご厚意にそいたいと存じます。

山本四代画集をご恵贈いただくことになりました経緯は、昨年十一月十日付信濃毎日誌に掲載されました大観筆〈麗日〉の左下段に大倉喜七郎氏、山本先生、大観の写真がございました。私共といたしましては、大観の資料を集めておりましたので、さっそく信濃毎日誌の編集局伊藤氏に御手紙をお送りし、非常にめずらしい写真ですので、ぜひ複写をお願いいたしましたところ、原画はすでに無くなっており、やむを得ず複写をしていただきました。その際山本様のご好意で画集をご恵贈いただくことになったと伊藤氏よりご連絡をいただきました。

私共は、山本四代先生の貴重な画集をご恵贈いただいたことは、幣館の資料が更に一段と充実することができました。衷心よりお礼申し上げます。……略……。一月九日より春を寿ぐ展を開催いたしますので、ご来京の折ご来館いただければ幸甚に存じます。今後とも一層のご協力を賜われますよう、お願い申し上げます。

まずは書中をもって厚くお礼申し上げます。 敬具

昭和六十一年一月六日

この礼状が発端となって、大観記念館との交流が始まる。特に記念館学芸部長、長尾政憲文学博士の取材案内をしたり、手紙等の解説、大観関係の資料をいただくことができた。

#### 四 大観記念館学芸部長長尾政憲博士のこと

拙著『世相今昔画集・第二巻』（昭和六十三年）に「横山大観記念館」「嶽心荘」について書いたことがある。なお、同書に「大観の建築趣味と嶽心荘」と題して、長尾博士の寄稿をいただいた。このイラスト画集に対する葉書には、

「拝復 漸く朝夕は涼しくなってきました。お元気でですか、このたびは『世相今昔画集』〈嶽心荘〉①②③をご恵送いただきありがとうございました。拝見致しました。」

さすがに、イラストも堂に入ったご麗筆にて、文章も要領よくきびきびとお書きになっており敬服しました。その節は、たいへんお世話になりましたことを、思いおこしました。山之内町には又おうかがいしたい思い出の地となりました。……略。敬白

昭和六十三年九月四日 長尾政憲

書面中に山ノ内町のことが出てくる。これは昭和六十一年三月二十七日に、嶽心荘など大観関係の取材に来長された時のことだ。この時の手紙に、取材行動が書いてあるので紹介したい。

「拝啓 このたびはわざわざ貴重な時間をおさき下さいます、遠路、諸方をご案内賜わり、まことに恐縮のほかございません、厚く厚く御礼申し上げます。」

ただ、主目的の果亭文庫所蔵の大観書簡が拝見できず、がっかりしましたが、志賀山文庫、ならびに安代館で教えてもらった丸善旅館のとが撮影できましたので、少し面目がたちました。

ただ残念なのは、先生のお宅で撮影した「岳心荘図面」撮影のときにも、危いなどは思ったのですが、光線不足にて、皆目、文字が読めません。お手数をおかけしますが、少し濃い目にして、ゼロックスコピーをして送って下さいませんか。カラーのコピーならベストですが、モノクロの普通のコピーでも結構ですが……略……。これまでにわかりましたことは、

- (1) 興隆寺住職藤沢岡克氏の役割が相当、大きいこと。
- (2) 山本保村長の熱意。
- (3) 荒井寛方画伯のサポート。
- (4) 昭和五年のローマ展へ大観が団長格で出かけ、半年留守をしたあと、地元で再遊を働きかけたこと（実現しなかったらしいですが）
- (5) 大観個人よりも、美術院への働きかけであったらしい。

せっかくの「芸術村」計画が実現しなかったのは残念ですが、渋温泉……児玉果亭 上林温泉……寺崎広業 角間温泉……横山大観と日本美術院と、芸術への関心が御地方に高かった事例として、歴史に残る佳話となります。

今後ともいろいろお世話になります。これをご縁によりしくご教導頂ければ幸いです。まずは延引ながら御礼言上まで。敬具  
昭和六十一年四月四日 長尾 拝

山本 先生

文中にある「嶽心荘図面」（写真1）は、筆者の手元にある。その後、調査が続けられ、中間報告の手紙をいただく。それによれば、

「前略……その後、荒井寛方氏の令孫のところに、大観の手紙二通があり、貴家ご所蔵の手紙と関連しているものと、判明しまし

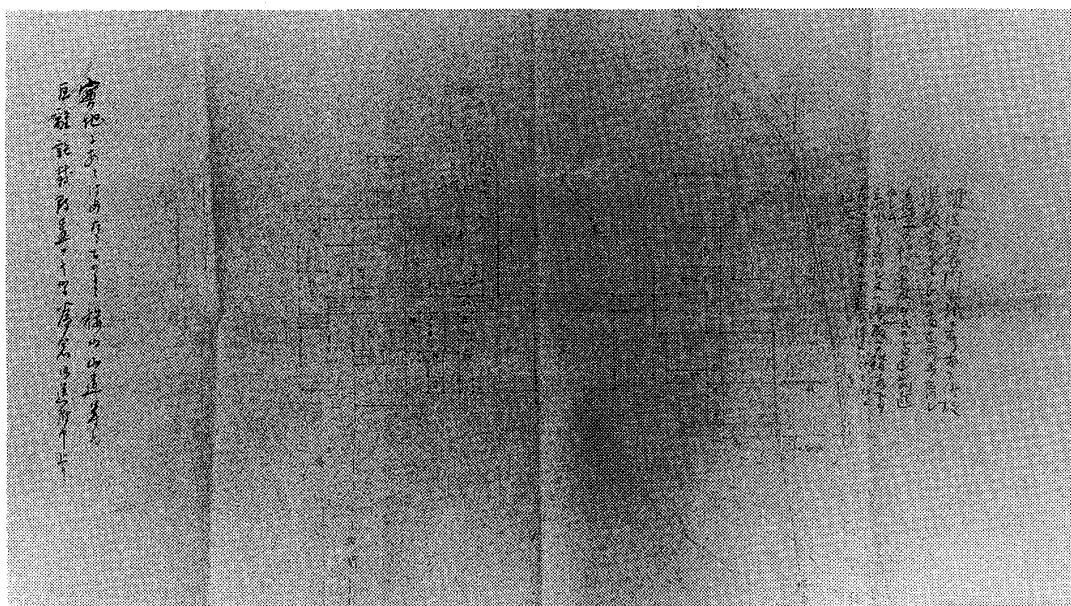


写真1 「嶽心荘図面」

た。目下、館報の原稿、十枚くらいにまとめた、執筆苦斗中です。もし完成したらお目にかけます。……略

昭和六十一年五月二十二日

この手紙をいただいてから間もなく「館報」(第四号、財団法人横山大観記念館、昭和六十一年六月一日)が送られてきた。表題には「開館十周年記念特集」とある。この中に、長尾博士は「大観と信州角間芸術村」と題して、これまでの調査研究をされたものを、発表されている。

長尾博士の略歴については『横山大観と近親の人々』(長尾政憲著、横山大観記念館、昭和五十九年)と『福沢屋論吉の研究』(長尾政憲著、思文閣出版、昭和六十三年)の奥付にあったものの中から選んだものである。それによると、

「長尾政憲(ながお、まさのり)一九一四年広島県に生まる。三十五年広島高等師範学校卒業。六十三年法政大学経済学部卒業。七十四年同大学院人文科学日本史学専攻博士課程修了。博物館学芸員資格取得。財団法人横山大観記念館学芸部長。

主な著書は、『横山大観と近親の人々』『京都御役所向大概覚書(上・下)』(共著)『福沢論吉西航手帳』(解説・解説)『福沢屋論吉の研究』など。」

## 五 大観との連絡役は荒井寛方

長尾博士が執筆された「館報」(第四号)によれば、

「一、地元がわの推進役の藤沢・山本らは、池ノ端大観邸を訪れて、鉦鼓洞客間で会談した。そしてそれを模したいろりの間(十六畳)と大画室(三十五畳)、居間(十六畳)、その他四畳半三間に温泉場などのある建坪百十坪、敷地千五百坪の隠寮の建築図面を作成

した。(この建築図面は山本保の子山本秀磨氏所蔵……略。)

大観のがわの連絡掛は、美術院同人、荒井寛方(一八七八—一九四五)があたった。……略……。彼は北信にもよく出かけていたらしい。昭和四年五月四日付の寛方あての手紙(荒井聖也氏寛方の孫所蔵。なお寛方が大観の代りに信州へ出張したことを語るらしい六月二十七日付、落成直前の写真のみを周囲に土塀を回らす希望を述べた七月二十一日付大観書簡も所蔵。)で、大観は、

〈信州武藤様(棟梁か)より 早々出張之様御催促之御書面を接受仕候へとも 病氣今猶快方二不至、医師よりは旅行絶体に禁ぜられ候〉

と現地から出張の催促をうけたが病気でいけないのでよろしく伝えてほしい、また、

〈家屋は先方に万事御一任仕度候〉

と、追書している。しかし、寛方の山本保村長あて五月二十四日付の手紙(山本秀磨氏所蔵)では、地元から建築図面を寛方へ送って来たので大観に送ったところ、図面に朱筆を入れて送って来たから訂正してほしい、大観は、

〈建築全体より見て、離れ之室、鬼門に出はり居〉

これが気にかかるので、離れ全体を朱線まで前進させてほしい、という意見である、と伝えている。]

文中にある昭和四年荒井寛方書簡(写真2)は、長尾博士が解説されたものである。本稿これ以外の書簡も全て長尾博士である。

「拝啓 陳者御送附の図面早速横山先生へ送り申上候処、只今御手紙と共に図面朱筆入申越に候間、御訂正相願上候

先生より之御手紙に御送附之温泉場図面少々朱筆入れ候御一覽之上先方様に御申入れ相成候ては如何に候や、建家全体より見て、離

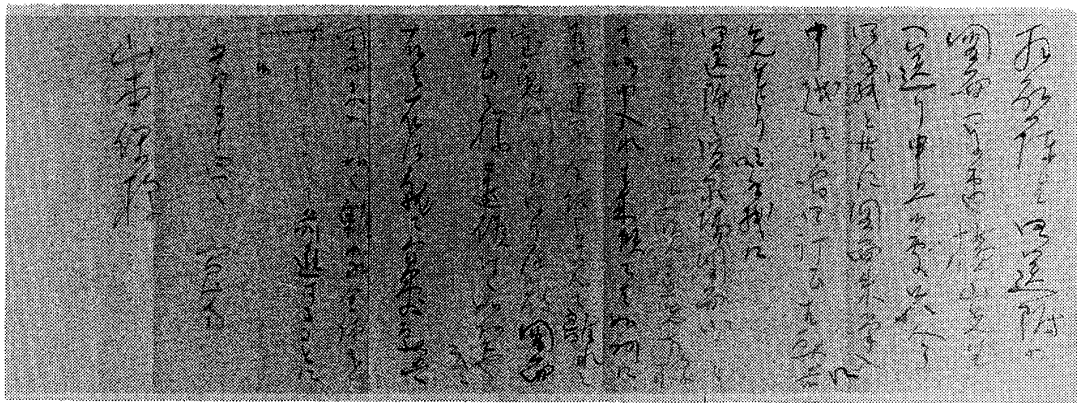


写真2 荒井寛方から山本保あての手紙

れ之室、鬼門に出はり居候故 図面訂正之様被遊候は、如何ニや云々

右之趣に就て宜敷願上候図面朱入之如く離家全体を朱線の処まで前進することに候

五月二十四日 寛方 山本 保 様

現在の「嶽心荘」は、大観が指示したように建築されている。また、昭和四年の建築中の写真も筆者の手元にある。

なお、寛方について『世界美術辞典』(新潮社、昭和六十年)には、次の様に出ている。

「荒井寛方(あらい、かんぼう) 明治十一年八月十五日(昭和二十年四月二十一日)一八七八—一九四五) 日本画家。本名は寛十郎。栃木県塩谷郡氏家に生れ、福島県郡山市で客死。水野年方(としかた)に歴史画を学ぶ。紅児(こうじ) 会創立に参加、ま

た初期文展でしばしば受賞した。のち日本美術院に出品、同人となる。大正五年(一九一六)タゴール(一八六一—一九四一)に招かれ渡印、アジャンターの壁画などを模写する。大正七年帰国後は毎年院展に宗教画を出品。法隆寺金堂壁画模写にも従事した。代表作は『乳糜(にゆうび) 供養』(一九一五、東京国立博物館)。  
タゴールに招かれたとあるが、長尾博士によれば、ピットラ美術学校日本画教師として、インド人を教えたという。

### 六 嶽心荘完成と大観来角のこと

「嶽心荘」が完成したので、昭和四年九月十五日午後一時に披露式を行うという案内状を出している。この招待状や来賓名、会計簿などが山ノ内町佐野興隆寺に残されている。(写真3)

大観はこの大画室を「嶽心荘」と命名。この「嶽心荘」と書いたものを、額装して贈っている。(写真4)

後になって、大観記念館の先生から聞いたのであるが、この書は大観が三枚書いたものの一枚だという。

披露式前の九月十一日に、大観らは院展の仲間達と大挙して角間に来ていた。一行が訪れた際、「嶽心荘」玄関前で記念撮影をしている。この写真のことは「信毎」記事として、前述している。大観達は新築なった「嶽心荘」に三泊して、十四日に帰京した。

来角中のエピソードは、『おくしなの人物風土記』(内田恒雄、北信ローカル社、昭和五十一年)に「横山大観画伯」とした項に出ている。また、藤沢岡克和尚の十二日二次会のメモには、

「大観が前田青邨、大塚稔、山本村長らと帰来し、寝入りばなの諸画伯を起床させて踊り興じた。」

とある。この日はまた、角間川で来角の画伯達と記念撮影もしてい



写真3 嶽心荘関係資料(興隆寺蔵)



写真4 横山大観筆「嶽心荘」

る。

#### 七 「名家書翰」と大観礼状

楽しかったであろう三泊四日の「嶽心荘」での生活を思い出し、帰京した大観や院展の諸画伯から、礼状が届けられる。大観の手紙は連名宛になっているが、中村岳陵、速水御舟、堅山南風、荒井寛方、橋本静水、橋本永邦、大倉喜七郎、大塚稔らは山本保（蕙田）村長宛になっている。これらの手紙は村の財産として、散逸しないように、軸装の巻物となっている。現在、児玉果亭文庫に「名家書翰」として所蔵されている。箱書は山本保の書である。ただ、「館報」に書いてある長尾博士の調査によれば、同行した同人のうち、小林古径、前田青邨、大智勝観の礼状がみあたらないのは、どうしたことかとおある。

大観書簡は次の通りである。（写真5）

「啓上 愈々御清祥奉大賀候 陳者 今回不思議の御縁にて、名勝角間霊泉場に大画房御新築之上御招請を蒙り候は誠に一身之光栄に有之、萬謝の辞もなき次第に御座候、顧れば非才他日能く此御寵遇に如何に相酬る得んかを懼れ居候、特ニ此度は大倉男爵初め院同人諸氏と共に非常なる御款待を蒙り只々感激罷在候處、御芳情之程奉深謝候、早速御挨拶申上べき筈之處帰途持病相起り彼は取紛れ延引仕候段、不悪御寛恕被下度願上候、先は乍矢礼書中御礼迄、如此ニ御座候 頓首

昭和四年九月十九日 横山大観

藤沢岡克様 宮崎三郎治様 宮崎晋一郎様 小島泰治様 山本保様  
鈴木松之助様 山本寅之助様 各位

「名家書翰」には、角間の風景や人情を賞めたものもあるので紹

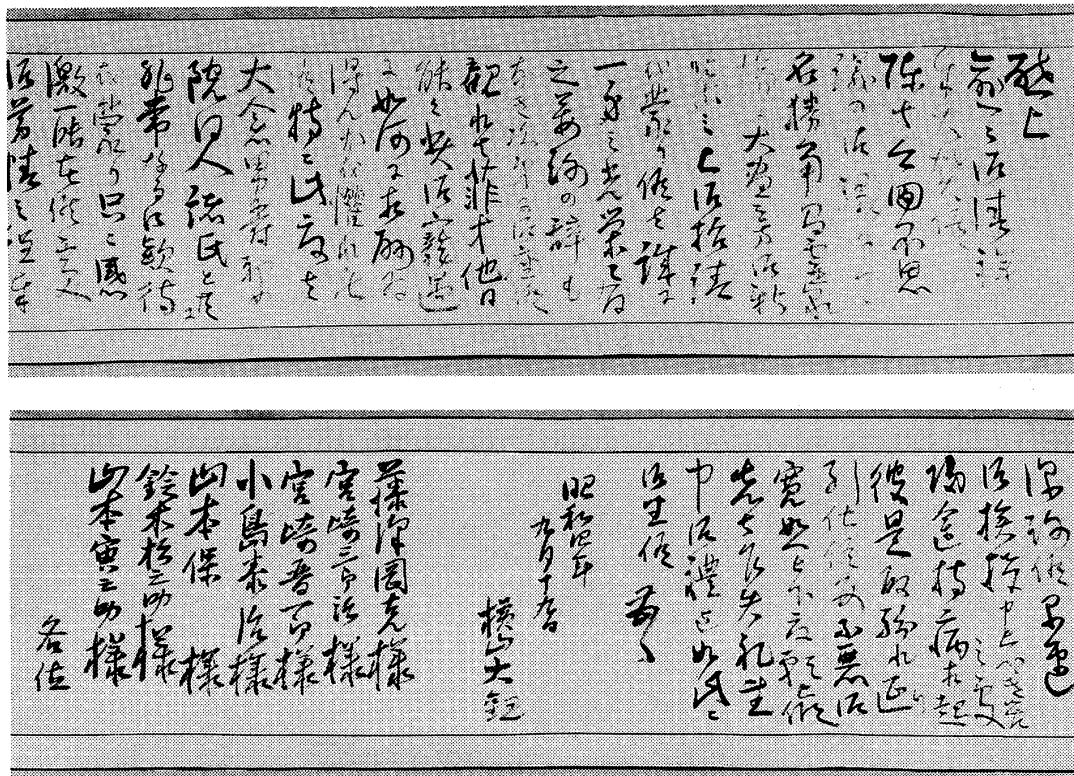


写真5 横山大観礼状 (果亭文庫蔵)

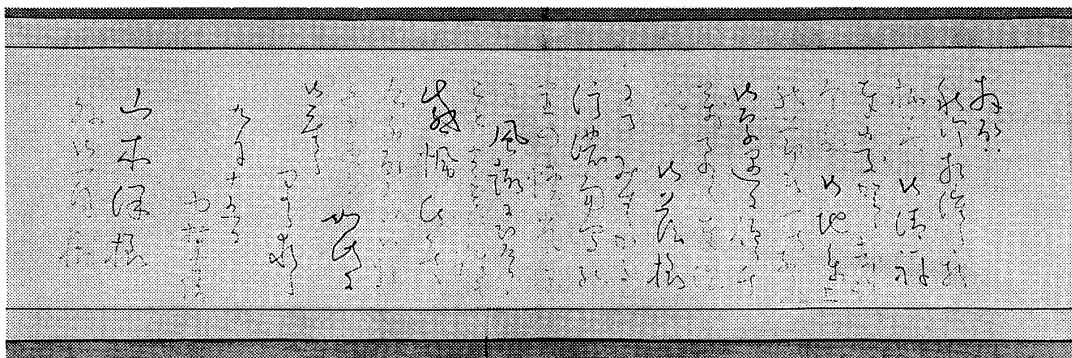


写真6 中村岳陵礼状 (果亭文庫蔵)

介したい。

中村岳陵の書簡。(写真6)

「拝啓 秋冷相催し候折柄候  
へ共、御清祥奉慶賀候、却説、  
今度御地参上の節ハ一方ならぬ  
御厚遇に預り千萬忝く奉深謝  
候、御蔭様にて、みすぶかる信  
濃角間の里の煙嵐深き風趣にひ  
たり候ことまことに難有感佩仕  
居候、右不取敢御礼述申度如  
此に御座候早々頓首

九月十五日 中村岳陵

山本保様 外御一同様

堅山南風の書簡には、

「貴村御有志諸賢の深甚なる  
御歓待を蒙り清奥忘我するるば  
かり穂波の明媚なる風光と温泉  
と相俟て諸氏の芳情深く感佩仕  
候。」

とある。

また、速水御舟は、

「御錦地の風光と貴台始め角  
間の皆様の御高風ニ相接を得し  
こと洵ニ光榮の至りに奉存候。」  
と風光明媚をたたえている。



### 八 「ローマ展」と大観挨拶状

「ローマ展」については、前述「信毎」記事の中で紹介した。この展覧会のためにイタリアに出発することを報告した、大観の挨拶状がある。(写真7) この書簡も筆者が所有している。これには、

「啓上 寒気厳敷候処愈々御機嫌克く大慶之至ニ存候、扱て来る四月伊太利国ニ於テ現代日本画展覧会開会いたされ候ニ付ては野生も之ニ携はりて渡欧致候事ニ相成、来る二十七日午前十時東京駅出発三十日神戸解纜白山丸ニ乗船旅程ニ上リ候筈ニ御座候、隨て此処半年程自然御無沙汰申上候事ニ相成申すべく、何卒不悪御諒承願上候。

実は拝趨之上親しく御暇乞申上べき筈之処ニ候得共、出発前何角多用ニ取紛れ居候間乍失礼書中を以て右御挨拶申上度、如此ニ御座候。頓首

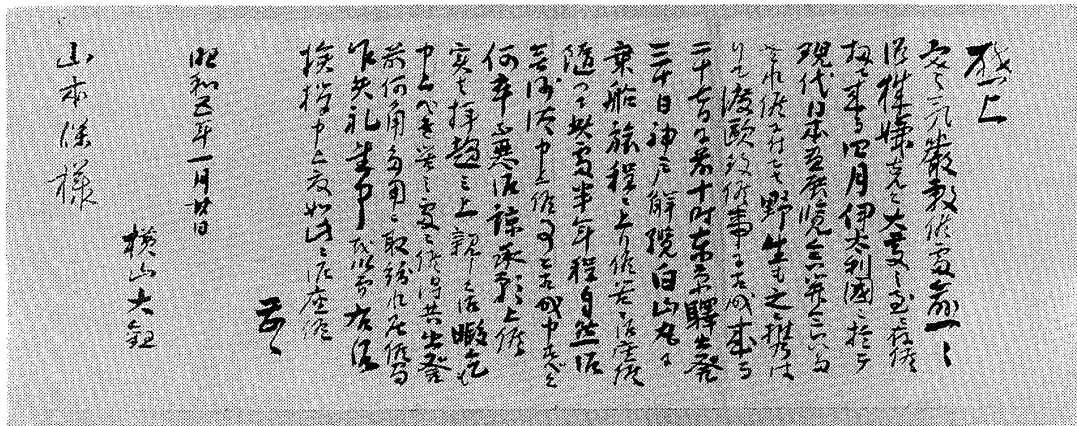


写真7 「ローマ展」出発への大観挨拶状

昭和五年一月廿日  
山本 保 様  
横山大観

このように半年の間の留守をするのでよろしく、と書いている。昭和四年九月信州への来遊と、イタリアでの「現代日本画展覧会」の準備と、何かと大変な日程であることが分かる。

「ローマ展」について、長尾博士は「館報」の中で、「ローマ展は大成功に終わり、六月二十八日大観は帰国した。」とある。

### 九 角間再訪勧誘への大観の詫状

前出「館報」によれば、昭和六年七月二十日付の大観の手紙は、角間再訪を勧めた藤沢和尚に、寸暇もなく、当分角間行が困難であると詫びているという。この手紙のコピーが無いので、ここでは紹介できないのが残念である。

さて、ここに長尾博士よりいただいた、九月十八日大観返書のコピーがある。これには昭和四年頃と注釈が付いている。しかし、もう一方の昭和六年十月五日の文面と続いている。このようなわけであるから、昭和四年でなく、昭和六年九月十八日と思われる。この書簡は現在志賀山文庫の所蔵となっている。これには、

「啓上 秋冷愈々御清祥奉賀候、陳者先日は御懇書と併せて函面御送り被下御芳情千萬奉謝候、早速御返事申上くべき筈之処院の俗務ニ逐はれ延引失礼仕候、貴命の如く是非本月中に罷出度く存居候へとも、院展開会中は高貴の方々何時会場に御成に相成候や不明ニ有之候為、耆日も会場を留守に仕兼居候、右様の次第にて、同行諸氏とも相謀り、十月六日頃（院展十月四日閉会）に東京出発の予定に有之、御了承被下度候、いつれ人数其他之件は月末改めて申上度

存居候、 頓首

追而 村長並に総代各位にも宜敷御鳳声願上候、

九月十八日 横山大観

興隆寺御住職 藤澤岡克 様 御前

この手紙の中に、図面のことが出ています。この図面のことについて、「館報」では、

「この図面は、院の同人の希望者に分譲する別荘地の図面かも知れない。この話は横山美代子氏（大智勝観三女、大観の養嗣大玄夫人）も記憶しておられるという。……略。この院展への、高貴の方方の御成は、大正十一年九月の創立二十五周年記念展への皇太子殿下行啓が初めらしく、以後毎年皇族の来臨がつづき、昭和六年は秩父宮、東伏見宮妃、李王殿下が来ておられる。」

別荘地分譲の話については、その後のことは不明である。また、このことに関連して、アトリエが建築されたという話も聞いたことがない。九月十八日の大観の手紙に続いて、十月五日の大観の手紙には、その後、角間行きが「無期延期」となったことを知らせている。この書簡は現在、渋温泉丸善旅館、滝沢幹男氏が所蔵しておられる。これによれば、

「拝啓 前便申上候通り、昨日同行四人諸氏とも種々相談致候へとも、友人之死去にて先以而六日出立困難となり、又斯道開発上重大の關係ある海外進出の爲の米國トレード展覧会作品之件にて、本月中に制作致さねばならぬ事に相成、其間に、京都展覧会開会日切迫、關係委員の渡米等、連続湧起仕、目下の処一日の余日も無之様相成、なかなかのん気に旅行など致し居り候時間も無之相成候間、茲暫く無期延期ニ致度候間、不悪御了承仰度候、

其内小生丈にても都合相つき候は一日たりとも伺る度存居候、

先は角間儀一時延期申上度如此ニ御坐候、何卒皆様に宜敷御鳳声願上候、 頓首

十月五日 横山大観

藤沢岡克 様 梧下

このように角間再訪の勧誘に対して、自分だけでも都合をつけて行きたいと書いています。だが、この手紙にあるように「無期延期」ということが、終生続いたのである。大観の手紙も、昭和六年十月五日をもって、これ以後のものは見当たらない。このことについては後述したい。

#### 十 贈答された大観筆「叭々鳥」のこと

山ノ内町佐野地籍に興隆寺がある。すでに登場している藤沢岡克住職は、大観の誘致に熱心であった。当時の山本保（号・蕙田）村長も、相談役でもあり、推進役をしていた。「嶽心荘」建築の苦勞に報いるために、藤沢和尚に、横山大観筆「叭々鳥」（写真8）の絵が贈られた。

山本村長には、横山大観筆「菊」の作品が贈られたという。この絵の行方は不明である。

大観筆「叭々鳥」の絵を紹介した本がある。『畫と鳥』（内田清之助著、内外書籍、昭和十二年）によれば、

「日本畫によく描かれる支那の鳥——一、叭々鳥。この鳥は、支那中部以西——四川、陝西、湖北、江蘇、福建、雲南等の諸省と、我が臺灣の平地に分布する。臺灣産のものは、頭部にある羽冠か心持ち長く、多少違ふのだが、それは鳥學上嚴密に律すればこそで、普通の意味では同じ鳥として差支ない。臺灣では加令（カーレン）と呼ばれてゐる。恒春以南に多く、臺北あたりには本來は棲息しな

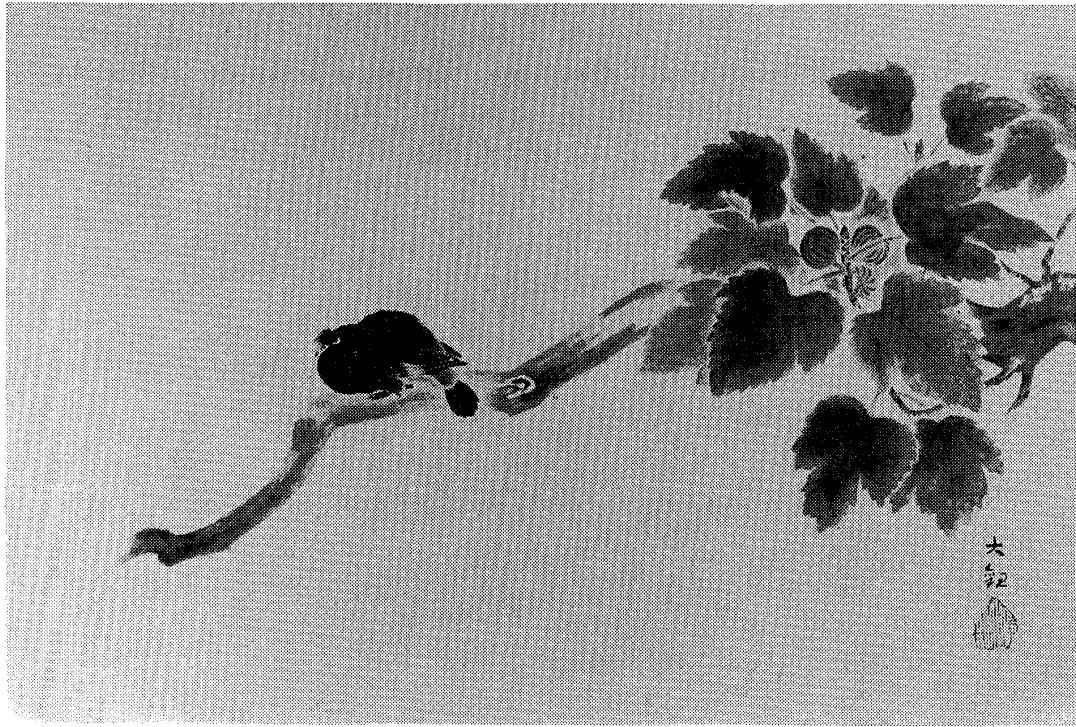


写真8 横山大観筆「叭々鳥」(興隆寺蔵)

いのであるが、今日では飼つたものが人為的に移植されて居るからか、全然見られぬ譯ではない。南部地方では人家の附近にも居る。椋鳥に近い鳥で頗る丈夫なものゆゑ、飼育して愛玩するにふさはしい。叭々鳥はそんな風に強い鳥であるのでよく起ることは、飼はれたものが放されて野生する事である。自然の分布は右に述べた範囲であるが、然し現今ではフキリツピンにも居る。これは一八五〇年頃、マニラで放鳥されたものが野生したものである。又加奈陀のバンクレーパーにも野生してゐる。これは一九〇〇年頃放されたのが次第に殖え、二十五年後には同市の周囲二十哩四方に擴がり、二萬羽を算へる程になつたと云ふことである。支那では極く普通に飼養せられ、籠鳥として我國にもポツポツ渡つて來て居る。

叭々鳥はどんな鳥かと云ふに、椋鳥に似て、も少し肥り全身眞黒である。ただ翼の眞中邊に大きな白斑があるが、これは多くは静止時には黒羽に蔽はれて見えないのが普通である。尤も交尾期になると静止中にも多くハッキリ顯れてゐる。然し翼を擴げて飛ぶ場合には、この白斑が極めて明瞭に現れる。殊に左右の翼の白斑が長くなつてちやうど八の字形を呈する、叭々鳥又は八々鳥の名は畢竟それに由來する。その他此の鳥は嘴の根元から頭の上に冠のやうに長い羽毛が生えて居る事など顯著な特徴である。尾の先は白く、眼と脚と嘴は黄色である。雌も雄も外見だけでは殆んど違はない。

支那では叭々鳥のことを又鸚鵡(くわく)(鸚鵡とも書かれる)と呼ばれてゐる。此の鳥は、古來、眼が鋭いので聞えて居る。本草綱目に《その睛瞿々然たり、故に鸚鵡と名く》とあるのを見ても知られる。實は先頃、病中の小閑に漱石の『草枕』を読み返して氣付いた事だがあの小説の主人公が那古井の温泉へ行つて、宿の隱居に端溪の硯を見せられる。その端溪に鸚鵡眼が九つあるとかで、隱居が大いに自

慢する。この鳩眼と云ふのも《叭々鳥の如く鋭い眼玉》を指したのであらう。

さて、この問題の叭々鳥の眼であるが、私は、そんなに鋭い眼とも思つてゐなかつたのだが、横山大観氏が伊太利で開かれた邦畫展に出品された製作に、この鳥の畫があるが、それでは爛々たる眼睛を點じて居る。とりも直さず古説に據る、先入主あつてのことだらう。叭々鳥の瞳を乳の中に入れ、人間の眼に差すと、視力著しく増大し、遠方まで物を見る事が出来るなどと云ふ迷信もある。つまり其の眼の鋭いと云ふために外なるまい。」

この頁には、横山大観筆「無花果に叭々鳥」の写真が掲載されている。本稿写真8と同じである。

### 十一 昭和の激動と両者に寸暇なし

『横山大観と近親の人々』（長尾政憲著、昭和五十九年）に出てゐる「横山大観―九十年のあゆみ」と、『山本四代画集』（昭和四十八年）にある、山本保の当時の行動記録を比較してみると、両者に寸暇のないことが分かるのである。

大正三年 横山大観は八月、文展審査員から除かれる。九月日本美術院を谷中三崎町に再興、観山とともに経営の中心。

大正六年 山本保（号、蕙田）第十八回全国博覧会に絵画出品妙技三等賞を受賞。

大正八年 山本保第二十一回日本画会に絵画出品し当選する。

大正十五年 大観宮内省より宮中調度制作を命ぜられる。「鸛くろこ」  
 図「御苑雨」「松竹梅」襖絵。

山本保五月穂波村々長に就任（――昭和八年、昭和十二年より昭和二十一年）

昭和三年 穂波村役場新築。

昭和四年 穂波村角間温泉に「嶽心荘」新築。九月大観来角。

ローマ美術展のため屏風「夜桜」「有明の月」制作。

昭和五年 山本保 夜間瀬川砂防護岸工事。後に建設大臣より表彰される。（昭和二十九年）また、頌徳碑が建立される。

（昭和三十六年）

大観ローマ展に赴き、夫人と各地を歴遊。五月観山歿。

十二月母寿恵歿。

昭和六年 大観帝室技芸員となる。

昭和十二年 大観初の文化勲章を受ける。帝国芸術院会員。

山本保は穂波小学校改築に尽力する。

以後大戦になり、文化事業どころでなくなる。このようにして、両者の関係はいつしか切れてしまったのである。

本稿執筆にあたって、資料提供に協力して下さいました横山大観記念館学芸部長長尾政憲博士と、興隆寺山本興仁任職に感謝を申し上げたい。

#### ○参考文献

- 『畫と鳥』（昭和十二年、内田清之助、内外書籍）
- 『山本四代画集』（昭和四十八年、山本秀麿、カシヨKK）
- 『横山大観と近親の人々』（昭和五十九年、長尾政憲、鉦鼓洞）
- 『信濃毎日新聞』（昭和六十年十一月十日「美・私の一点」）
- 『世界美術辞典』（昭和六十年、新潮社）
- 『館報』（第4号、昭和六十一年、横山大観記念館）
- 『世相今昔画集・2』（昭和六十三年、山本秀麿、北信ローカル）
- 『福沢屋論吉の研究』（昭和六十三年、長尾政憲、思文閣）
- 『紀要』（第二十一号、平成十年、上田女子短期大学）